

家計内の経済関係と夫妻関係満足度

——「現代核家族調査」を使用して

木村 清美

(大阪産業大学経済学部 元教授)

1. はじめに

本稿の目的は、家計内の夫妻間経済関係が夫妻関係満足度に与える影響を分析することである。収支の共同を前提とする家族生活において、夫妻がそれぞれの収入をどれだけ共有し、それぞれの個人的支出をどのように調整するかは、夫妻関係の重要な一側面である。しかし、夫妻関係満足度に関する先行研究では、この側面をあまり取り上げてこなかった。

筆者は、かつて、「現代核家族調査（1999年）」データを用いて同テーマで探索的分析を行い、家計内の経済関係と夫妻関係満足度との間に次のような関連を見出した（木村 2004b）。①共働き世帯では、夫の収入すべてを妻に渡すことが夫妻双方の関係満足度を高める、②専業主婦世帯では、夫の使う金額が妻のそれより多いほど夫の夫妻関係満足度が高い、③夫妻とも、家族のために自分のためのお金を切り詰める経験が多いほど夫妻関係満足度が低い、④夫の夫妻関係満足度が低いほど、妻は夫より切り詰める経験を多くしている。しかし、その際、夫妻同伴行動や夫の家事・育児分担など、夫妻関係満足度への影響が明らかにされている要因（長津ほか 1996; 永井 2000; 木下 2004; 山口 2007; 田中 2007）を分析モデルから除外していた。今回はこれらの要因を統制して、家計内の経済関係が夫妻関係満足度に及ぼす影響力を明らかにしたい。

2. 方法

(1) 使用するデータ

分析に使用するのは、財団法人家計経済研究所が2008年6月に実施した「現代核家族調査」のデータである。この調査は、一世帯につき妻と夫、さらに、小学4年生から18歳までの子どものいる世帯については子どもも調査対象としている¹⁾。本稿では、そのうち妻票と夫票を用いて分析を行った。なお、調査方法、調査対象者の基本属性等については本誌の「『現代核家族調査』の概要」および、財団法人家計経済研究所編（2009: 7-25）を参照されたい。

(2) 分析方法

妻の就業の有無別に、妻と夫それぞれの夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析を行った。独立変数は、下記（b）のとおり、家計内の夫妻間経済関係に関する5変数である。統制変数として、夫妻の会話やレジャー、夫の家事・育児分担、基本属性等10変数を投入した（c）。なお、妻の就業の有無別に分析するのは、専業主婦世帯と共働き世帯では家計要因の夫妻関係満足度に与える影響に差のあることが明らかになっているからである（木村 2004a）。

(a) 従属変数

設問「あなたは現在の夫婦関係に満足していますか」に対する回答を従属変数として使用した。選択肢は「満足」「まあ満足」「やや不満」「不満」

図表-1 夫妻関係満足度

	共働き世帯		専業主婦世帯	
	妻	夫	妻	夫
満足	27.9	38.4	31.2	35.4
まあ満足	50.7	49.4	51.1	55.0
やや不満	13.1	8.8	8.6	7.9
不満	8.3	3.4	9.0	1.7
合計 %	100.0	100.0	100.0	100.0
夫妻関係満足度得点	2.98	3.23	3.05	3.24
標準偏差	0.862	0.746	0.873	0.668
N	337	328	221	229

注:「夫妻関係満足度得点」は、「満足」を4点、「まあ満足」を3点、「やや不満」を2点、「不満」を1点とした

「どちらともいえない」「わからない」の6つで、そのうち「満足」～「不満」にそれぞれ4, 3, 2, 1点を与え、「どちらともいえない」「わからない」を欠損値とした。点数化後の夫妻関係満足度の平均値は、図表-1のとおり、共働き世帯の妻が2.98点、夫が3.23点、専業主婦世帯の妻が3.05点、夫が3.24点となっている。妻よりも夫のほうが、共働き世帯よりも専業主婦世帯のほうが満足度が高い傾向がみられる。

(b) 独立変数

独立変数として、夫の収入の渡し方、自分のために使う金額、自分のために使う金額の夫妻間格差、自分のためのお金を切り詰める頻度、切り詰める頻度の夫妻間格差の5変数を投入した。各変数は次のとおり作成した。

- ①夫の収入の渡し方：夫票で「収入のすべてを妻に渡している」と回答したケース²⁾を「1」、その他を「0」とするダミー変数。
- ②自分のために使う金額³⁾：妻・夫票の「実際に自分のために使っているお金は、毎月のあなたの手取り収入額（副収入も含めて）の何割ぐらいですか」に対する回答を、夫妻それぞれの手取り月取額を数量データ化したもの⁴⁾に掛け合わせて金額を算出した。専業主婦については、設問「実際に自分のために使っているお金は、ご主人から渡されるお金の何割ぐらいですか」を用い、これを「夫が妻に渡す金額」⁵⁾に掛け合わせて算出した。
- ③自分のために使う金額の夫妻間格差：「夫が自

分のために使う金額」から「妻が自分のために使う金額」を引いた。値が高いほど、夫の使える金額の方が妻よりも高いことを示す。

- ④自分のためのお金を切り詰める頻度：妻・夫票の設問「家族の生活費のために、自分のために使うお金を切り詰める

ことがどのくらいありますか」に対する回答のうち、「よくある」「時々ある」「たまにある」「全くない」にそれぞれ4, 3, 2, 1点を与え点数化した。

- ⑤切り詰める頻度の夫妻間格差：妻の得点から夫の得点を引いたものである。値が高いほど、妻の切り詰める頻度の方が夫よりも高いことを示す。

(c) 統制変数

統制変数として、夫妻の会話頻度、レジャー頻度、夫の家事・育児分担を投入した。これらは、前述のとおり先行研究で夫妻関係満足度の決定要因とされている変数である。また、基本属性要因として、結婚年数、結婚年数2乗、子どもの有無、夫妻の学歴、夫妻の可処分所得も投入した。

- ①会話頻度：妻・夫票の設問「あなた方ご夫婦は、どのくらい会話をしていますか」に対する回答に対し、「よく話す」「話す」「まあ話す」「あまり話さない」「ほとんど話さない」「全く話さない」にそれぞれ6, 5, 4, 3, 2, 1点を与えて数量データ化した。妻の夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析には妻票の回答を、夫の夫妻関係満足度を従属変数とする分析には夫票の回答を用いている。以下のレジャー頻度、夫の家事・育児分担についても、同様。
- ②レジャー頻度：妻・夫票の設問「休日、あなたは次のような形で、どの程度レジャーのために外出しますか」と「休日、あなたは次のような形で、どの程度自宅でレジャーや趣味を楽しん

図表-2 独立変数の記述統計量——共働き世帯

	従属変数			
	妻の夫妻関係満足度 (N=337)		夫の夫妻関係満足度 (N=328)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
<独立変数>				
夫の収入の渡し方(すべて渡す=1)	0.54	0.499	0.55	0.498
自分のために使う金額 (万円/月)	2.82	3.274	4.90	3.549
自分のために使う金額の夫妻間格差(万円/月)	2.35	4.302	2.22	4.212
自分のためのお金を切り詰める頻度	2.72	1.087	2.38	1.065
切り詰める頻度の夫妻間格差	0.32	1.260	0.40	1.230
<統制変数>				
会話頻度 ^注	4.81	1.201	4.72	1.095
レジャー頻度 ^注	5.32	3.611	5.10	3.600
夫の家事・育児分担 ^注	23.59	25.238	23.78	22.247
結婚年数(年)	14.09	6.360	13.67	6.066
結婚年数2乗	238.74	172.767	223.66	162.805
子どもの有無(有=1)	0.80	0.402	0.81	0.395
妻学歴(大卒以上=1)	0.24	0.430	0.26	0.441
夫学歴(大卒以上=1)	0.53	0.500	0.52	0.500
妻の可処分所得 (万円/月)	12.72	10.225	12.28	10.120
夫の可処分所得 (万円/月)	37.47	12.314	37.33	12.061

注:妻の夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析には妻の回答を、夫の夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析には夫の回答を用いた

でいますか」の「夫婦と子どもで」「夫婦二人で」に対する回答に、それぞれ「毎週のように出かける」に4点、「月に2～3回」に2.5点、「月に1回くらい」に1点、「2～3カ月に1回くらい」に0.4点、「ほとんど出かけない」に0点を与え、4つの設問の得点を加算した。なお、子どものいない夫妻の「夫婦と子どもで」は非該当になるが、子どものいる夫妻の平均得点を一律に当てはめた⁶⁾。

- ③夫の家事・育児分担：妻・夫票の設問「あなたのご主人(夫票では「あなた」)はどのくらい家事をなさいますか」の「料理」「食事の後片付け」「掃除」「洗濯」「子どもの世話、しつけ、勉強・進路指導」の回答に対し、それぞれ「ほぼ毎日」に28点、「週に4～5日くらい」に18点、「週に2～3日くらい」に10点、「週に1日くらい」に4点、「月に2～3日くらい」に2.5点、「まったくしない」に0点を与え、5つの家事・育児の合計点を算出した。子どものいない夫妻の「子どもの世話、しつけ、勉強・進路指導」については、子どものいる夫妻の平均得点を一律に当てはめた⁷⁾。
- ④結婚年数：妻票の設問「あなた方ご夫婦は結婚

して何年たちますか」の回答を用いた。

- ⑤結婚年数2乗：先行研究で、横断的調査では夫妻関係満足度は結婚年数の経過とともにU字曲線を描くことが明らかになっている(永井2005)ので、結婚年数の2乗項も投入した。
- ⑥子どもの有無：子ども「有り」を「1」、「ない」を「0」とするダミー変数。
- ⑦妻の学歴：大学卒業と大学院修了を「1」、その他を「0」とするダミー変数。

るダミー変数。

- ⑧夫の学歴：妻の学歴と同様に作成したダミー変数。
- ⑨妻の可処分所得(共働き世帯のみ)：妻票の設問「毎月の手取り収入額(副収入も含めて)は何万円くらいですか。預金やローンの返済金が天引きされている場合は、その金額も手取り収入に含めてお答えください」の各カテゴリー回答の中間値を用いた⁸⁾。
- ⑩夫の可処分所得：妻の可処分所得と同じ方法で数量データ化した。

3. 結果

(1) 共働き夫妻の夫妻関係満足度の決定要因

図表-2は、重回帰分析に用いた独立変数の記述統計量である。まず、妻の夫妻関係満足度を説明する各変数を見ると、夫が収入のすべてを妻に渡している世帯は54%、妻が自分のために使う金額は約2.82万円で、夫妻間格差は約2.35万円である。家族のために自分のお金を切り詰める頻度は2.72点で、夫妻間格差は0.32点ある。夫の夫妻関係満足度を説明する変数は、収入のすべてを妻に

図表-3 夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析の結果——共働き世帯

	従属変数	
	妻の夫妻関係満足度 (N=337)	夫の夫妻関係満足度 (N=328)
	β	β
<独立変数>		
夫の収入の渡し方(すべて渡す=1)	-0.015	-0.026
自分のために使う金額	-0.061	-0.216 *
自分のために使う金額の夫妻間格差	-0.154 *	0.110
自分のためのお金を切り詰める頻度	-0.106 †	-0.123 †
切り詰める頻度の夫妻間格差	0.016	-0.039
<統制変数>		
会話頻度	0.499 ***	0.407 ***
レジャー頻度	0.079	0.068
夫の家事・育児分担	0.098 *	0.014
結婚年数	-0.060	-0.471 *
結婚年数2乗	-0.012	0.473 *
子どもの有無(有=1)	0.076	-0.094
妻学歴(大卒以上=1)	0.079 †	0.154 **
夫学歴(大卒以上=1)	0.009	0.054
妻の可処分所得	-0.006	0.021
夫の可処分所得	0.088 †	0.045
R ²	0.400	0.309
Adjusted R ²	0.372	0.275
F値	14.256 ***	9.282 ***

***: p<0.001, **: p<0.01, *: p<0.05, †<0.10

図表-4 独立変数の記述統計量——専業主婦世帯

	従属変数			
	妻の夫妻関係満足度 (N=221)		夫の夫妻関係満足度 (N=229)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
<独立変数>				
夫の収入の渡し方(すべて渡す=1)	0.64	0.482	0.62	0.486
自分のために使う金額 (万円/月)	3.04	2.555	5.30	4.051
自分のために使う金額の夫妻間格差(万円/月)	1.99	3.984	2.38	4.400
自分のためのお金を切り詰める頻度	2.87	1.105	2.23	1.045
切り詰める頻度の夫妻間格差	0.59	1.250	0.57	1.229
<統制変数>				
会話頻度 ^注	4.78	1.124	4.77	1.093
レジャー頻度 ^注	6.13	3.449	6.26	3.309
夫の家事・育児分担 ^注	16.98	16.804	17.49	17.277
結婚年数(年)	12.00	5.714	12.30	6.192
結婚年数2乗	176.51	149.376	189.39	167.063
子どもの有無(有=1)	0.86	0.348	0.86	0.352
妻学歴(大卒以上=1)	0.23	0.419	0.22	0.414
夫学歴(大卒以上=1)	0.66	0.476	0.65	0.478
夫の可処分所得 (万円/月)	39.11	13.400	40.23	13.592

注：図表-2と同じ

めに自分のためのお金を切り詰める経験の夫妻間格差も先行研究と整合している(御船 1995; 木村 2001a, 2001b)。

図表-3に、共働き夫妻の夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析の結果を示す。まず、妻の夫妻関係満足度についてみると、自分のために使う金額の夫妻間格差が有意な効果を示している。つまり、夫の使うお金が自分の使うお金より多いほど妻の夫妻関係満足度は低下するということである。また、自分のために使うお金を切り詰める頻度が多いほど、妻の満足度が低下する傾向もみられる。

夫の満足度については、妻の場合とは違って、自分のために使う金額そのものとの間に有意な負の効果があられている。自分の使うお金が多いほど満足度が低いという関連は考えにくいので、夫妻関係満足度が低い夫ほど、自分の収入を自分のために多く使っていると考えられる。また、夫の場合も、自分のために使うお金を切り詰める頻度が多いほど満足度が低下する傾向がみられる。

渡している夫は55%、夫が自分のために使う金額は約4.90万円で、夫妻間格差は約2.22万円である。家族のために自分のお金を切り詰める頻度は2.38点で、夫妻間格差は0.40点ある。自分のために使う金額の夫妻間格差も、家族の生活を維持するた

標準偏回帰係数(β)の絶対値をみると、経済関係変数(独立変数)の効果は会話頻度ほど大きくはないが、夫の家事・育児分担よりも大きい値を示している。

図表-5 夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析の結果——専業主婦世帯

	従属変数	
	妻の夫妻関係満足度 (N=221)	夫の夫妻関係満足度 (N=229)
	β	β
<独立変数>		
夫の収入の渡し方(すべて渡す=1)	-0.131 *	0.089
自分のために使う金額	0.047	0.009
自分のために使う金額の夫妻間格差	-0.037	0.033
自分のためのお金を切り詰める頻度	-0.344 ***	-0.036
切り詰める頻度の夫妻間格差	0.122	-0.060
<統制変数>		
会話頻度	0.249 ***	0.455 ***
レジャー頻度	0.315 ***	0.129 †
夫の家事・育児分担	0.036	0.003
結婚年数	0.132	0.063
結婚年数2乗	-0.171	-0.039
子どもの有無(有=1)	0.057	0.061
妻学歴(大卒以上=1)	0.115 *	-0.015
夫学歴(大卒以上=1)	-0.042	0.004
夫の可処分所得	-0.130 †	-0.044
R ²	0.404	0.277
Adjusted R ²	0.363	0.230
F値	9.961 ***	5.856 ***

***: p<0.001, **: p<0.01, *: p<0.05, †<0.10

(2) 専業主婦と夫の夫妻関係満足度の決定要因

専業主婦世帯の分析に用いた独立変数の記述統計量は図表-4のとおりである。妻の夫妻関係満足度を説明する変数の平均値は、夫が収入のすべてを妻に渡している世帯が64%、妻が自分のために使う金額は約3.04万円で、夫妻間格差は約1.99万円である。家族のために自分のお金を切り詰める頻度は2.87点で、夫妻間格差は0.59点ある。夫の夫妻関係満足度を説明する変数は、収入のすべてを妻に渡している夫が62%、夫が自分のために使う金額は約5.30万円で、夫妻間格差は約2.38万円である。家族のために自分のお金を切り詰める頻度は2.23点で、夫妻間格差は0.57点ある。

専業主婦とその夫の夫妻関係満足度を従属変数とする重回帰分析の結果を図表-5に示す。まず、妻の満足度についてみると、自分のためのお金を切り詰める頻度が多いほど夫妻関係満足度が有意に低下することを示しており、その標準偏回帰係数(β)の絶対値は会話頻度やレジャー頻度よりも大きい。この大きな効果は、共働き世帯の夫妻にはみられなかったものである。また、夫が収入

のすべてを妻に渡すことは、妻の夫妻関係満足度に有意な負の効果があることも示されている。

一方、夫の満足度を説明する変数をみると、夫妻間の経済関係はどれも有意な効果を示していない。

4. まとめと考察

本論文では、家計内の夫妻間経済関係、すなわち、夫の収入がすべて妻に渡されるか、夫妻が自分のために使う金額の多寡、家族のために自分のためのお金を切り詰める頻度が、夫妻関係満足度に及ぼす影響について分析し

た。結果は次のようにまとめられよう。

家計内の夫妻間経済関係は、夫妻関係満足度に影響を及ぼすことが再び確認された。その影響力は、共働き世帯と専業主婦世帯、妻と夫で異なっていたが、なかには、夫妻の会話やレジャー、夫の家事・育児分担要因よりも強い影響力をもつ場合もあった。

共働きの妻は、自分のために使う金額の夫妻間格差が大きいほど夫妻関係満足度が低下しており、その影響力は会話頻度よりは小さいものの、夫の家事・育児分担より大きかった。共働きの妻が夫との関係において満足を得るには、自分の使う金額が夫のそれと比べて公平であることがかなり重要のようである。

共働きの夫のほうは、妻との関係満足度が低いほど自分のために多くの金額を使っていた。このことは、夫妻関係の良し悪しが、夫の家計に入れる金額に影響することを意味する。妻子の生活水準が夫との関係に左右される可能性をこの結果は示唆しているといえよう⁹⁾。

また、共働きの夫妻はともに、自分のためのお

金を切り詰める経験が多いほど夫妻関係満足度が低下する傾向がみられた。自分が経済的に犠牲になることが、配偶者に対する不満につながっている。妻は夫の収入や家計に入れるお金の不足が原因と感じ、夫は妻の家計管理能力に原因があると感じるのかもしれない。

専業主婦の夫妻関係満足度にも切り詰める頻度は負の影響を及ぼしており、しかもその影響力は会話やレジャー等の夫妻同伴行動要因よりも大きかった。自らの収入をもたない専業主婦にとって、自分のためのお金を切り詰めなければならぬ家計状況が夫妻関係の強い不満につながっている。また、夫が収入のすべてを妻に渡すことも、専業主婦の夫妻関係満足度を低下させていた。妻は家計管理責任を専ら引き受けることを負担に感じているのだろうか。さらに検討が必要である。専業主婦の夫については、妻との経済関係と夫妻関係満足度との間に関連はみられなかった。

最後に、以上を前回の結果(木村 2004b)と比較すると、ほぼ一致した効果が認められたのは、「自分のためのお金を切り詰める頻度」が夫妻関係満足度に対してもつ負の効果であった。この変数は、前回の分析では共働き世帯・専業主婦世帯を問わず夫妻ともに効果があり、本稿でも、共働き夫妻および専業主婦の夫妻関係満足度に効果が認められた。しかし、それ以外の変数については一貫した効果は確認できなかった。今後さらに検証を重ねていきたい。

注

- 1) ただし、該当子が複数いる場合は最年長の子ども1名のみを対象としている。
- 2) 妻の収入がある世帯については、夫票の間13付問9「あなたの毎月の手取り収入額のうち、何割ぐらいを奥様に渡していますか」に対し「すべて」と回答したケース、妻の収入がない世帯については、問14「あなたは、手取り収入額のうち何割ぐらいを奥様に渡していますか」に対し「すべて」と回答したケース。
- 3) 歪度と尖度が10未満になるように、極端に大きな値を除外した。その結果、妻が自分のために使う金額の最大値は21.3万円、夫のそれは30.0万円となった。
- 4) 設問「毎月の手取り収入額(副収入も含めて)は何万円くらいですか。預金やローンの返済金が天引きされている場合は、その金額も手取り収入に含めてお答え

ください」の回答から、「収入はない」に「0」、「5万円未満」に「2.5」、「5万～10万円未満」～「60万～65万円未満」にはその中間値、「65万円以上」に「67.5」を与え数量データ化した。なお、分析対象サンプルには収入のない夫はいなかった。

- 5) 「夫が妻に渡す金額」は、夫票の設問「手取り収入のうち何割ぐらいを奥様に渡していますか」の回答を手取り月収額(数量データ化したもの)に掛けて算出したものである。
- 6) 子どものいる世帯の「休日、あなたは次のような形(夫婦と子ども)で、どの程度レジャーのために外出しますか」に対する妻の回答は平均1.79点、夫の回答は平均1.81点。「休日、あなたは次のような形(夫婦と子ども)で、どの程度自宅でレジャーや趣味を楽しんでいますか」に対する妻の回答は平均1.62点、夫の回答は平均1.71点。
- 7) 子どものいる世帯の「子どもの世話、しつけ、勉強・進路指導」の平均得点は、妻の回答で7.39点、夫の回答で7.34点。
- 8) 注4)を参照。
- 9) 筆者らが行った離別母子世帯のインタビュー調査では、夫妻関係の悪化を契機に夫が妻にお金を渡さなくなり、妻子が生活に困窮するに至ったケースも見出されている(木村 1999)。

文献

- 李基平, 2008, 「夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度——妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して」『家族社会学研究』20(1): 70-80.
- 木下栄二, 2004, 「夫婦関係のパターンと変化——II 結婚満足度を規定するもの」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』東京大学出版会, 277-291.
- 木村清美, 1999, 「家計内の不平等と権力」財団法人家計経済研究所編『ワンペアレント・ファミリー(離別母子世帯)に関する6カ国調査』大蔵省印刷局, 59-68.
- , 2001a, 「家計の共同性と夫妻関係」『季刊家計経済研究』49: 14-24.
- , 2001b, 「『稼ぎ手』イデオロギーと家計内不平等」『大阪産業大学経済論集』2(3): 23-33.
- , 2004a, 「財布の紐と夫妻関係」財団法人ハイライフ研究所編『現代家族のライフスタイルとストレス』財団法人ハイライフ研究所, 65-86.
- , 2004b, 「家計内の経済関係と夫妻関係満足度」『季刊家計経済研究』64: 26-34.
- 財団法人家計経済研究所編, 2009, 「現代核家族のすがた——首都圏の夫婦・親子・家計」財団法人家計経済研究所.
- 末盛慶, 1999, 「夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感——妻の性別役割意識による交互作用」『家族社会学研究』11: 71-82.

- 田中慶子, 2007, 「家族領域での時間と妻の関係満足度」『季刊家計経済研究』76: 37-44.
- 永井暁子, 2000, 「出産・夫の育児と妻の夫婦関係満足度——『消費生活に関するパネル調査 (JPSC)』による分析」佐藤博樹・石田浩・池田謙一編『社会調査の公開データ——二次分析への招待』東京大学出版会, 185-194.
- , 2005, 「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『季刊家計経済研究』66: 76-81.
- 長津美代子・細江容子・岡村清子, 1996, 「夫婦関係研究のレビューと課題——1970年以降の実証研究を中心に」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編『いま家族に何が起きているのか——家族社会学のパラダイムをめぐって』ミネルヴァ書房, 159-186.
- 御船美智子, 1995, 「家計内経済関係と夫妻間格差」『季刊家計経済研究』25: 57-67.
- 山口一男, 2007, 「夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス」『季刊家計経済研究』73: 50-60.

きむら・きよみ 大阪産業大学経済学部 元教授。主な論文に「家計の共同性と平等性」(善積京子編『スウェーデンの家族とパートナー関係』青木書店, 2004)。生活経済学専攻。